

# たまのよこやま

令和2年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー報告

## 『方形周溝墓を考える』 ..... 1

遺跡だより 北区 十条台遺跡群 ..... 3

かゆい所に手が届く 遺物の基本的な見方 動物遺存体（貝類）編③ ..... 4

遺跡庭園生き物図鑑 2021 秋 ..... 5

1/964 ～多摩ニュータウンの発掘調査を振り返る～ 多摩ニュータウン No. 192 遺跡 ..... 6

「現場のミカタ」令和3年度企画展示解説（3）「謎」を明らかに ..... 7

# 方形周溝墓を考へる

「東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー」は、東京都埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団・埼玉県埋蔵文化財調査事業団の各公益財団法人が、発掘調査や研究の成果を広く皆様にお伝えするとともに、それぞれの業務と役割について理解を深めていただくことを目的として毎年開催している事業です。第13回目となる今回は、本来、昨年度の1月17日（日）に開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言発令のため延期され、年度の明けた10月2日（土）にようやく開催することができました。

今回は『方形周溝墓を考える』をテーマとし、江戸東京博物館で開催されました。方形周溝墓とは、弥生時代から古墳時代にかけて北海道・青森県・岩手県・秋田県・沖縄県を除く全国で造られた墓で、方形の周溝の内側には盛土による「方台部」があったことが推測されていますが、確認された事例はあまり多くありません。また、周溝の四隅のうちいくつかが途切れていたり、方形ではなく円形であったりと、多くのバリエーションが存在します。埋葬施設には、金属製品や玉などの副葬品が伴うことから、被葬者は有力な地位にあった者と推測されています。

この方形周溝墓について、三都県の基調報告とともに、昭和女子大学の山岸良二氏による講演、ミニシンポジウムが行われました。

## 基調報告1 「東京都内の方形周溝墓 ～集落との関係を中心に～」



当センターの相原正人調査研究員が、東京都内の近年の発掘調査成果を基に、方形周溝墓と集落の関係について報告しました。近年調査された日野市平山遺跡などの事例から、墓域を構成する方形周溝墓群と集落を構成する竪穴住居跡群の関係性について検討し、1つの墓域に対して1つの集落が存在する例、1つの墓域に対して複数の集落が存在する例、複数の墓域に対して複数の集落が存在する例など、いくつかのパターンがあることが報告されました。

また、過去に調査された多摩ニュータウン遺跡では、その被葬者は多摩丘陵の各ムラの生業や資源を掌握した有力者と考えられていることから、近年の調査事例においても、複数の集落をまとめた有力者が存在したことや、集落内における有力者のグループが存在していたことを示す可能性があることが指摘されました。

## 基調報告2 「神奈川県内における低地の方形周溝墓 ～近年の調査成果から～」

かながわ考古学財団の戸羽康一氏は、神奈川県内における近年の発掘調査事例の中から、台地と低地に注目し、方形周溝墓の立地について報告されました。ま



開催を待つセミナー会場

ず、台地上に位置する方形周溝墓の事例から、集落と墓域の併存や、同時期に方形周溝墓が群集する事例、大型の方形周溝墓の存在、金属製品や玉などの副葬品の存在、古墳時代でも一定期間存続することなどの特徴を指摘し、低地に立地する海老名市の中野桜野遺跡と社家宇治山遺跡と比較しました。その結果、台地と低地では共通点が多く、大きな違いは見られないことが指摘されました。さらに、古墳時代前期の事例として社家宇治山遺跡に近い秋葉山古墳群を取り上げ、古墳時代に方形周溝墓と古墳が併存する段階の社会の様相について考察されました。



### 基調報告3 「方形周溝墓の構造」

埼玉県埋蔵文化財調査事業団の青木弘氏は、埼玉県内で近年発掘された久喜市小林八束1遺跡を中心に方形周溝墓の構造について報告されました。小林八束1遺跡では、複数の方形周溝墓に盛土や主体部が残存しており、この盛土の方法と土量に注目しました。盛土の方法は、平坦に積み上げる方法や斜めに積み上げる方法、内側の盛土の後に外側に盛土をする方法など、複数の方法が指摘されました。また、盛土量から作業に必要な人数や盛土の高さについて考察した結果、方台部が10m四方の方形周溝墓では40人×40日で掘削から盛土まで可能であることがわかりました。また、確認された盛土量に対して周溝掘削土量が非常に多いことから、周溝掘削土の一部は盛土に使用されなかった可能性も指摘されました。



### 記念講演 「方形周溝墓研究 60年～2つの五輪の間～」

昭和女子大学の山岸良二氏は、方形周溝墓の研究

のあゆみをテーマに講演されました。氏は学生時代から長年方形周溝墓の研究に取り組んで来られ、それに関する著作も多数あります。1964年は、東京オリンピックが開催された年であると同時に、東京都八王子市の宇津木向原遺跡で初めて方形周溝墓が発見された年であることから、2021年の東京オリンピックとも関連させながら、約60年の方形周溝墓研究の学史を振り返りました。また、1964年から現在までを、方形周溝墓の発見から類例増加と研究の深化、韓国での類例報告など、内外の経済発展や国土開発の進展による発掘調査の増減と段階的に関連付け、全国の調査事例を紹介されました。また、現状の課題として、周溝を持つ墓制の初現・発生時期、造墓集団の生業や移動ルート、被葬者層の階層、方形周溝墓と古墳との関係などを挙げられました。



### ミニシンポジウム 「方形周溝墓を考える」

最後に、基調報告と記念講演の演者4名によるミニシンポジウムが行われました。会場参加者との質疑応答に加え、墓域と集落の関係や立地の違い、方形周溝墓の構造、被葬者と造墓集団の性格などに関して活発な討論が交わされました。

今回のセミナーは、感染防止の観点から募集人数を限った開催となりましたが、そんな中においても154名の方にご参加いただきました。来年度は「古墳時代後期から終末期にかけての様相を探る」というテーマで、かながわ考古学財団の主催により、令和4年1月22日（土）に川崎市宮前市民館で開催予定です<sup>\*</sup>。コロナ禍はまだ予断を許さない状況ですが、1日も早く収束し、次回のセミナーも安全に開催できることを願っております。（守屋 亮）

<sup>\*</sup>募集は令和3年12月24日に終了しました。



ミニシンポジウムの様子

## 北区 十条台遺跡群

所在地 : 北区中十条2・3丁目地内

調査期間 : 2021年8月～(発掘調査中)

調査面積 : 325.43㎡+250.83㎡

十条台遺跡群(北区No.19遺跡)は、武蔵野台地の東縁、十条台の崖線上に位置し、東西1.1km、南北4.6kmの範囲内に広がり、亀山遺跡、宿遺跡、南橋遺跡など旧石器時代から近世にかけての著名な遺跡が含まれています。

現在東京都埋蔵文化財センターでは同遺跡群の北側、現在の都道460号線に沿って沿道一体整備に伴う発掘調査を実施中です。今回は今年度の調査で検出されている2つの道路跡を紹介します。

現在の都道460号線は「岩槻街道」と呼称されています。これは現在の都道が江戸時代の「日光御成街道」の道跡を踏襲していることに関係します。「日光御成街道」は江戸時代の脇往還(五街道以外の主要街道)で、徳川将軍が日光東照宮に参拝する際に使用されました。その道中は本郷追分(現在の東大農学部前)で中山道と分かれ、埼玉県の幸手で日光街道に合流し、日光に向かいます。途中の岩槻城で将軍が宿泊したことが名前の由来でしょうか。

発掘調査では、都道西側に沿う形で近世の溝の一部が見つかっており(写真1左側の溝)、御成街道

の側溝と考えられます。御成街道の路面は都道の下に埋もれているようです。

さらに、この御成街道の側溝に壊される形で別の遺構が見つかっています。この遺構は硬く敲き締められた土(硬化面)が道状に広がる形で見つかっています。周辺の遺跡の調査成果から、この遺構は中世の「鎌倉街道中ツ道」の一部と推定され、硬化面は当時の路面と考えられます。この遺構の断面を観察すると、複数の硬化面が積み重なっていることが分かりました。これは時期を置いて数回にわたって道の作り替えや修繕が行われた結果によるものと考えられます。

十条地区内では、道路遺構の最下面で地面を浅く円形に掘り窪めたピット(穴)が連なって検出されています(写真2)。このピット内は路面同様に硬く敲き締められた土で充填されています。日本各地で調査された道路遺構では、路面下から波板状遺構という土坑列が見つかる例がありますが、このピット列もそれに類するものか、他の機能があるのか、今後の調査の進展により明らかになることが期待されます。(武内 啓)



写真1 日光御成街道側溝と鎌倉街道中ツ道の道路硬化面



写真2 硬化面下のピット列(写真白線内)

# かゆい所に手が届く

## 遺物の基本的な見方 動物遺存体（貝類）編③

今回は、遺跡から出土する「貝殻のサイズ」をテーマに、中央区築地市場跡遺跡の事例を紹介します。

築地市場跡遺跡は江戸時代に隅田川河口の浅い海を埋め立てて造られた、尾張藩蔵屋敷の一部です。屋敷地の舟入の縁にあたる土層からは大量の陶磁器類や木製品等と共に貝殻が出土しています。ハマグリ、ヤマトシジミ、サザエというように生息環境の異なる貝種が共伴するため、これらの多くは人為的に廃棄されたと考えられます。その一方で、直下にあたる武家地造成以前の水底と推定される層からは、当時生息していたと考えられるヤマトシジミが見つっています。そうすると、武家地期の当地にもヤマトシジミが自然に生息していた可能性があるため、自然に生息していた貝と、人為的に廃棄された貝を区別する方法が必要になります。貝殻のサイズの計測は、その方法の一つです。

図1はヤマトシジミの計測結果を示したものです。武家地造成前の水底からは最小で殻長6mm程度の幼貝も出土していますが、武家地期の貝層からは10mm以上のものしか検出されていません。サンプルの採集方法は変わらないため、片方で小さい貝を取りこぼしているとは考えられません。シジミの名産地である宍道湖での事例によると、ヤマトシジミは生後1年で殻長5mm、生後2年で10mm程

度に成長します<sup>※</sup>。生息環境によって成長速度は異なるため一概には比較できませんが、武家地期のものは、若い個体がすり抜けるような目の粗い道具で採集されたと考えるのが自然です。つまり、人為的に採集・廃棄された可能性が高いと言えます。

次にハマグリの例を見てみます。築地市場跡遺跡では殻長30-40mmのものが多く、60mm以上のものはほとんど出土していません（図2）。しかし他の江戸市中の遺跡では、愛宕下第4遺跡（旗本屋敷のあった地点）のように、約40-50mmと60-80mmの2サイズに偏る事例がよく見られ（図3）、大小のハマグリで料理や用途が分かれていたのではないかと考えられています。築地市場跡遺跡の貝層は、「小さなハマグリをたくさん利用する一方で、大きなハマグリを食す機会に乏しい条件下の生活ごみ」と言えます。また、ハマグリは殻長50mmを超えると生息場所を水深の深い場所へ移動することで知られていますが、築地市場跡遺跡で最も出土数の多かった30-40mmのものは浅瀬に棲むため潮干狩りの対象となります。さて、大きなハマグリを食べていないことは何を示すのか、潮干狩りで採れるサイズが多いのはなぜか……、廃棄を行った人々の背景を考えるためのヒントが隠れていそうです。

このように、同じ貝種でもサイズの違いに注目すると、さらに多くの情報を得ることができるのです。

（宮本由子）

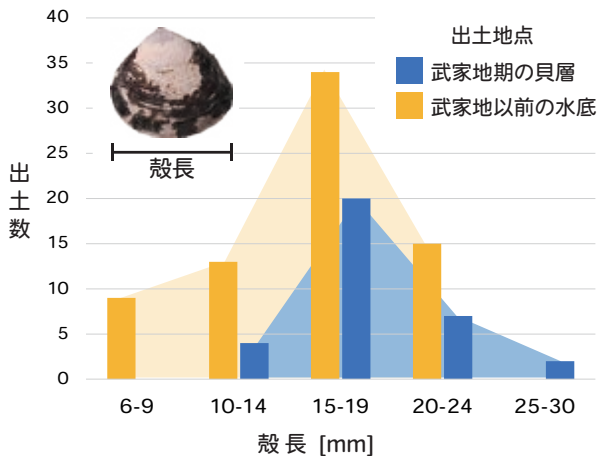


図1 築地市場跡遺跡のヤマトシジミの殻長分布

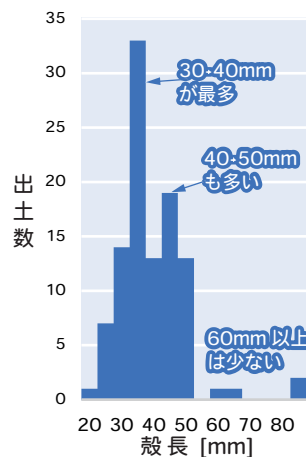


図2 築地市場跡遺跡のハマグリの殻長分布

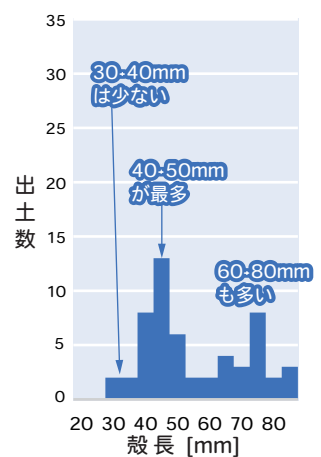


図3 愛宕下第4遺跡のハマグリの殻長分布

図1・2は東京都埋蔵文化財センター 2021『築地市場跡遺跡』、図3は同 2014『愛宕下遺跡III』のデータに基づき作成

※島根県水産技術センター HP より [https://www.pref.shimane.lg.jp/industry/suisan/shinkou/kawa\\_mizuumi/yutakana/yamato\\_shijimi.html](https://www.pref.shimane.lg.jp/industry/suisan/shinkou/kawa_mizuumi/yutakana/yamato_shijimi.html)

近頃は、朝夕が寒く感じるようになり、様々な木々が色づいた庭園は、すっかり晩秋の装いになっています。

今回の「遺跡庭園いきもの図鑑 2021」は“次世代へ繋ぐ”をテーマに、秋バージョンをお届けします。遺跡庭園の生き物たちがどのような方法で世代を繋いでいくのかを少しでもご紹介出来たら、と思います。

遺跡庭園「縄文の村」の植物は、発掘調査の成果から縄文中期頃、多摩ニュータウン周辺に生育していたと考えられる植物を50種類ほど植栽したものです。当時はコナラ、ムクノキ、クヌギ、ケヤキ、エノキ、クリ、トチノキなどの落葉広葉樹が優勢で、カシ、クスノキ、ツバキ、サカキ、ツゲなどの常緑広葉樹が混在していました。縄文人も緑や赤や黄色が入り乱れた紅葉に見とれていたのではないかと思います。

一方で、この季節は次世代への橋渡しのために、落葉樹も常緑樹もそれぞれの実や種などが成熟する時期でもあります。それらは人間も含めた動物たちの食糧ともなり、多くの命を繋いでいるのです。

この時期遺跡庭園で一番に目立つのは、ガマズミの赤い実ではないでしょうか。熟れて甘みが増すにつれ鮮やかな赤からやや赤黒くなりますが、



ガマズミ 熟れる



ツバキの実 割れる

そうするとその実を食べた鳥たちがあちらこちらへ種を拡散することになります。また、ガマズミの実自体は時が来れば自然に落ちて足元で発芽することにもなりますが、これはコナラやクリ、クヌギ、ツバキ、ム



ヤマイモのムカゴ



クロジなども同様です。

縦長のハート形をした黄色の葉が連っている所には、自然薯（ヤマイモ）のムカゴ（肉芽）がいくつも付いています。これは人間や小動物たちには自然からのおいしいプレゼントになります。

ケヤキは葉の付け根付近に種を付けますが、その部分だけを早々と枯らして葉と一緒に種を風に乗せます。ウバユリも実の中に薄い羽根のついた種を何層にも重ねており、風を使って種を飛ばしています。

“次世代へ繋ぐ”という命のバトンリレーは、自身の足元に次世代を拡散させる方法に加

えて、動物たちによって運ばれる方法、風を利用して種を遠くに飛ばす方法、根や地下茎を伸ばして広がっていく方法など様々です。自然界には多種多様な生態系が存在しており、またそれぞれが複雑に絡み合っています。どれ一つとっても、なくなっていいものはないのです。

(並木 仁)



ケヤキの種



ウバユリ 種飛ばし準備完了

今回紹介する遺跡は、町田市小山町に所在した多摩ニュータウンNo.192遺跡です。遺跡の調査は平成5年度・7年度に実施され、調査面積は22,000㎡にも及びました。

丘陵の尾根部とその斜面にかけての発掘調査で、旧石器時代～近世の遺構や遺物が検出されました。中でも、古墳時代後期の横穴墓が10基まるとまって発見されたのが大きな成果でした。

横穴墓群は遺跡の南西方向に開く小谷に、墓どうしが近接して営まれていました(写真1)。何と云っても、この墓の特徴は斜面を削り抜いて墓室をつくる点にあります。床には境川などから運んできた円礫や砂礫を敷き、入口は大きな河原石により閉塞されていました(写真2)。

横穴墓の平面形態はさまざまですが、この遺跡では、隅丸方形や奥壁に向かって幅を広げる撥形、徳利半裁形の墓室が見られます。墓の規模は全長4.5mを超えるものから1.4mの小規模なものまであり、埋葬の仕方にも違いがあるようでした。残念ながら、人骨が残っていないため詳細はわかりませんが、ごく小さな2号墓などは通常の埋葬ではなく、いったん別の場所に埋葬した後、改めて葬る「改葬」が想定されます。

墓の副葬品としては、5号墓から多くのガラス小玉

や耳飾(金環)などが見つかりました(写真3)。墓の主は装身具を身に付けて葬られていたのです。一方、東端の1号墓には10本もの鉄鏃(矢の先)が副葬されており、武器を携えて埋葬されていま

した。同じ横穴墓群の中にあっても、被葬者の性格の違いがうかがえます。

さらにもう一つ、重要な発見がありました。それは、平安時代の墓が南側の尾根上に営まれていたことです(写真4)。この墓は穴の中央に火葬した人骨を収めた土師器の甕を逆さに置き、周囲に木炭を充填させたもので、火葬墓と考えられます。

このことから、丘陵開発に従事した人々は、開拓地である相模平野を望むこの地に「終の棲家」を構えていたことがわかりました。調査報告書の作成に携わった私にとって、No.192

遺跡は古代丘陵地における墳墓の意義を考えるうえで、貴重な財産となっています。

(松崎元樹)

# 1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

## #50 多摩ニュータウン No192 遺跡



写真1 密集する横穴墓



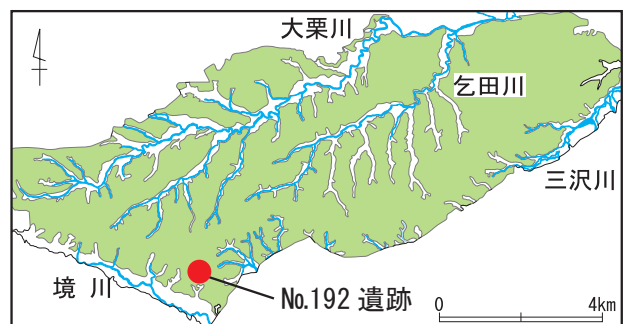
写真2 3号墓の状況



写真3 7号墓出土の金環



写真4 平安時代の火葬墓



現場のミカタ

—発掘調査を読み解く—

「謎」を明らかに

「現場」を観察するだけではわからないことも実はたくさんあります。石器以外の遺物がほとんど見つからない旧石器時代の遺跡は、まさに謎だらけの典型の一つです。出土状況と石器からどのように旧石器時代人の活動を復元できるのでしょうか。

図1は、石器の出土と接合状況を模式的に示した例です。石器は河原などで採集された岩石を打ち割ることで作られますが、遺跡で見つかった破片同士がくっつくことがあります。この「接合する」という作業によって、出土位置を示すだけであった「点」の情報を「線」により結ぶことで、遺跡の中で石器が製作されたことがわかります。また、接合資料から破片を打ち割った角度（方向）や細部を読み取ることにより、当時の製作者の動きや打ち割る道具を復元し、製作技術を解明することも可能になります。

さらに、石器にどのような石材を用いているか調べることにより、身近な河川で岩石を獲得したのか、あるいは遠方からもたらされてきたのかを知ることができます。場合によっては、特定の場所にしか分布しない岩石を用いていることがわかることもあります。このように石材の獲得に視点を向けることで、旧石器時代人の行動範囲をより具体的に推定することもできます。

一方、図2はいくつかの遺跡から出土した石器群を出土層位にしたがって並べ合わせたものです。図1はひとつの遺跡の分析にあたるものでしたが、多くの遺跡を分析し、それぞれの遺跡で出土する多様な石器の「組み合わせパターン」を見出すことも重要です。その共通性や違い、出土層位などを各遺跡同士で対比することにより石器の移り変わり、つまり時期の変化がよく理解できるようになるのです。

このように、限られた情報であっても一つ一つの「現場のミカタ」を積み重ねることにより、「歴史のミカタ」に繋がっていきます。今日もどこかの「現場」では観察と記録が行われています。

(塚田清啓)

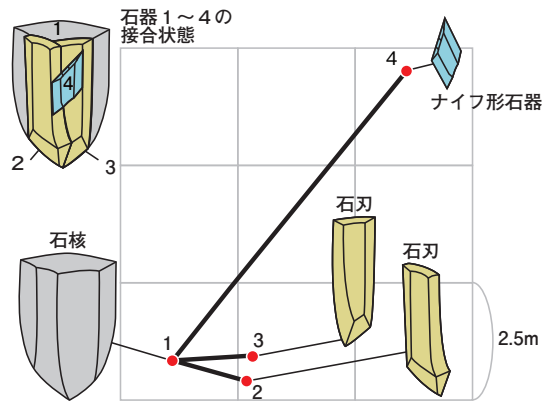
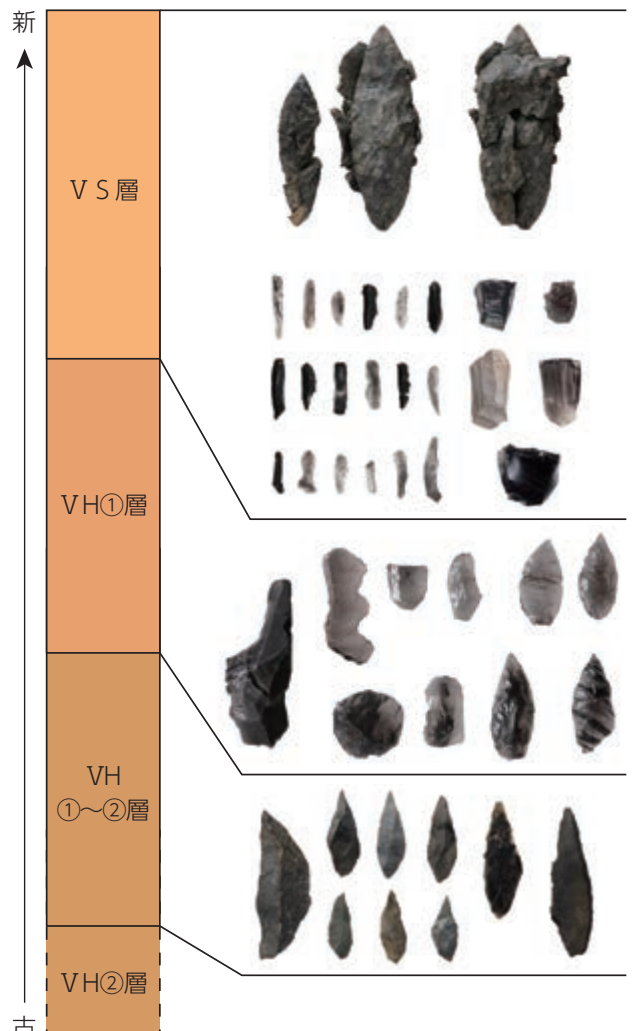


図1 石器出土と接合状況の例



VS層：(上) 尖頭器 [TNNNo.426 遺跡]  
 (下左) 細石刃・(下右) 細石刃核 [TNNNo.301 遺跡]  
 VH①層：(左から) 削器・搔器・尖頭器 [TNNNo.496 遺跡]  
 VH①~②層：ナイフ形石器 [TNNNo.512 遺跡]

図2 後期旧石器時代の石器群と出土層位

※今号の表紙：多摩ニュータウンNo.200 遺跡の方形周溝墓。手前から2号、4号。(1994～1995年調査)

